平成１５年度英語教員指導力向上研修「授業改善プロジェクト」　　番号　１５０７３

研究テーマ：基礎学力をつけるための指導の工夫

所属　高知市立一宮中学校
氏名　森佳奈子
RG　　JH１

１　研究の背景

１年の英語全クラスを TT で受け持ち、４月から「英語を話そうとする授業作り」に取り組んできた。授業の最初にピクチャーを使ってこれから学習しようとする表現や単語を導入し、教科書を使っての学習では主に言語活動・文字の導入（読むこと）を中心に行っている。生徒達は、「言って表現を覚える」という学習習慣がついている。しかし一方、言う活動には慣れてきたが、言って覚えることの定着には結構時間がかかり、ピクチャーなどを使っての毎時間の練習に予想以上に時間をつぎ込んでいる。また、テスト前など、単語を覚えたり文章を書くことに非常に苦手意識を持つ生徒がいる。また本読みの定着もあまりできているとは言えない。週３時間の厳しさをどう乗り越えるかが大きな課題である。

２　リサーチクエスチョン

「自己紹介を含む身近な話題についてのスピーチ及び対話ができ、
かつその内容について書くことができる。」

３　予備調査

（1）　予備調査１　スピーチに向けての授業観察の結果

自己紹介を書く所では、基本の４つの表現の徹底（B レベル）を図った。書ける生徒は「蜘蛛は英語で何と言うか・どう書くか」とか「ピーマンは」等の様な質問も多く出た。この段階ではほとんどの生徒がどのクラスでも A で B の生徒は数人であった。班内でのスピーチは、最初に言う人が大きな声で言えた所やよく書く作業で協力ができた班はスムーズにスピーチを行えたが、書いたものの再度言う時には助けが多く必要な生徒もいた。声の大きさが A レベル（みんなにきちんと聞こえた）は約 65%で、書いたことが言えなかったり、書いたものの班のみんなにきちんと伝えることができなかった生徒が予想以上に多かった。

（2）　英語力を示すデータ

期末テスト終了後、自己紹介スピーチ筆記テストとスピーチテストを行った。事前に自己紹介のスピーチと評価について話し準備をさせた。自己紹介筆記テスト結果　A（６文以上）は平均 44.8%で、クラスにより 67.7%だったり 28.9%だったりとバラつきが出た。又自己紹介スピーチ結果では、総合 A レベル（発音・声・内容オール A または B が１つ）は平均 81.8%で、できたクラスで 89.7%、できなかったクラスで 68.4%だった。スピーチの筆記テストでは、ほとんどが A レベルだったが、自然な会話の中で実際にどのくらい自己紹介ができるかどうか、又今後相手に質問をしたり応答したり表現を増やしながら自己紹介の幅をどのくらい広げていけるのか課題は残る。

（3）　生徒の自己評価から

学期末の簡単なアンケートで、約６割の生徒が「言えても書けない。単語を覚えることができない。」という意識を持っていることがわかった。その中には、なんとか英語を得意になりたいと思い１学期２５２ページ練習した生徒もいた。また、発音が難しいと感じる生徒もいることがわかった。生徒は全体的に自主学習ノートへの取り組みは頑張れたと考えており、学習した単語や表現をペアで使って楽しんでいる部分もある。

４　仮説の設定

（1）　仮説

仮説１　文字を完璧に音読できるようになると、表現も増え、書けるようになる。
仮説２　話したいこと・書きたいことがあれば話せる・書ける。
仮説３　３分間の対話時間を取り入れることで、自然な態度での話す力・書く力がつく。

（2）　実践の方法

- 音読をペア・グループで行う。（リーダー＆パートナー＆英語グループ）
- 自己表現の場を多く設ける。（タスクに近いCA・タスク）
- マッピング　対話表　インタビュー　プチタスク　カード　Show & Tell　・・・　など

５　計画の実践

仮説１の実践

毎時、授業の最初の３分～５分をペア音読を取り入れ、時々プチ音読テストを行った。ともかく、音読が全ての活動の始まり（全ての基礎）という意識で授業を始めた。

仮説２の実践

何を話すか、は大きな毎時間の課題である。場面の設定は慎重にシンプルであって将来的にコミュニケーション活動やタスクにつながる話題を選んだ。また話した内容・書いた内容を振り返れるようにノート指導を行った。また活動の評価を記録するよう個人評価カードを用いた。

仮説３の実践

毎時とはいかなかったが、１５問の対話シートを利用し、ペアでまたクラスでロールプレイ的に自分の言葉で話す時間を集中プランで行った。（ポートフォリオ資料参照）

その他の取り組み

夏休みに入って東京で行われた６WAY の研修会に参加し、富山の中嶋先生の提唱される「のりしろ学習」（活動と活動のつなぎ）が週３時間の中で学習効果をあげていくためには必要不可欠だと感じ、行動目標と１つ１つの活動を次につなげる具体的な年間計画及び評価計画を細かく立て直すことから始めた。年間計画を、学期ごとに行動目標を中心に考え、大きな活動をプロジェクトとし、細かく「読む」「聞く」「書く」「話す」の技能を重点領域として観点別評価と合わせて考えた。（ポートフォリオ資料参照）又、使用する言語材料、題材などをチェックしながら、コミュニケーション能力を育成するための活動として具体的に活動内容を考えた。又授業研究の機会があったので、指導と評価計画を作ってみた。（ポートフォリオ資料参照）

６　実践の結果

３つの仮説など取り組んできたことは、効果的だったと思う。まだまだ不十分な結果だとは思うが、生徒たちは、まず本読みから取り組もうとし、テスト前の確認でもペアで読みあう光景が見られた。また、対話シートは難しかったようだが、生徒たちに要求したい学力（読む・話す）に生徒ともども向き合い、会話テストをすると言ったこともあり、できるようになるまで挑戦することができた。仮説２については、今後も何を話すのかは大きな授業組み立ての課題だと思うが、プロジェクトを中心とした年間評価計画は、これまでスピーチとかディベートとか点として存在していた活動が、年間指導計画の中に位置付け事前事後指導を行うことにより、１本の線になってきた感じがする。

７　結果の検証

学習が進み、テスト内容なども難しくなったので、平均評価はどのクラスも実際の所４技能ともに若干落ちている。特に観点別では言語文化と表現の面で、１年１学期と比べると少し落ちた。だがこれまで、授業の中で英語で書くことについては、単語レベルであったのが、ほとんどの生徒が多少の間違いはあっても文を書くように取り組みだせた。また、コミュニケーション活動では、既習の言語材料を使って、簡単な応答に取り組みだせた。

８　成果と今後の課題

成果は、生徒の取り組みに表れ始めているが、今後の一番の課題としては、ペーパーテストやいろいろな活動で低い評価をもらった生徒にどうフィードバック指導して、次に頑張れるように、学習について来れるようにしていくか、ということと、学習についてくることが厳しくなった生徒でも、諦めず取り組もうとする言語活動をいかに計画し行っていくかということである。